

『会談興晤臥雅話』翻刻と注釈

藤井史果・金盛安泉・都竹彩香・長岡可紗・中川聡子
マルタチカロニペドロ・山野真優・吉田雪音

はじめに

本稿は、振鷺亭著『くわいだんおとしはなしもんがわ会談興晤臥雅話』(寛政期)の翻刻と注釈である。本作は書名からも知れるように、怪談と笑話の融合を意識して執筆された作品である。架蔵本と所見本はいずれも同板と考えられる。『名家短篇傑作集』(統帝国文庫 第四八編、幸堂得知編校訂、明治三十六年(一九〇三)刊)に一部翻刻が備わるが、現存する諸本との異同が多く、口絵も異なることから、稿本または異本を底本としている可能性が高い。本稿では、未翻刻の箇所を含め、あらためて全編の翻刻を行うとともに、具体的な注釈を加えた。

【凡例】

- ・ 翻刻は原則として原本の文字遣い、表記に従った。
- ・ 通読の便宜を図り、私に句読点を補った。
- ・ 改丁箇所は()を用いて丁付を示した。
- ・ 文中における「ハ」「ミ」「ニ」はそれぞれ「は」「み」「に」と平仮名で表記した。
- ・ 感動詞として使用されている片仮名に関しては、原本のまま片仮名で表記した。

【書誌】

- * 底本 架蔵本(藤井)
- * 表紙 丁子色 繁菱文 一八・〇×一三・〇 糹
- * 題簽 欠。左肩に「会談雅話 完」と墨書。
- * 構成 自序(一丁)、附言(半丁)、落咄(一丁半)、目録(一丁)、本文(二十八丁) 広告(一丁)

* 自序末「振鷺亭主人題」**印**、印は「振鷺亭／貞居」

* 内題 「会谈興晤臥雅話」
くわいたんおとしはなしもんがわ

* 柱記 上部に「会谈」

* 丁付 柱に口・口二・口四、一〇二十・又廿・廿

一〇廿七終

* 著者 自序末および本文末に「振鷺亭主人」とある。

* 匡郭 縦一五・八×一一・五糎

* 口絵 落咄三話に口絵あり。「見越若衆」と「於以良武」にそれぞれ人物の落書が見られる。

* 跋 なし

* 刊記・奥付なし

* 蔵書印 「濱和助」

* 自序に半丁六行、附言に半丁十行の罫入り。

【翻刻】

自序

斯ノ遊文ハ者。戯言ナレモ出ルニ於思ヨリ一也。蓋シ其ノ思ト者何ソ。唯タ在ルノミニ風刺スルニ焉。曩昔シ孔翁猶ヲ有リレ所レ戲。詩ニ曰ク。善戲謔ハ兮不レ為レ虚ト兮。此レ豈ニ無ツレ利ニ千世ノ教ニ一哉。於テ是ニ予爲テニ(口オ)之カ序ヲ一以テ壽

ストレ梓ニ云フ。尙在ニ拜年ニ春正月詣スルノニ黄鳥家一序操テニ筆ヲ勝鹿別邸茶室一 振鷺亭主人 題 押印【振鷺亭】

【貞居】(口ウ)

附言(反古文庫)

おこ 起りは世話の 実事より 教訓の 素直に 承有曾虚の ぼけものはなし 世話の 実事より 教訓の 素直に 承有曾虚の 鬼話に 轉じ合して 軼話となる 機関なり。蓋毛寶一 かはなし 亀猪牙舟二となつて 龍宮の大棧橋に 到り 芻莞 三百々爺 山本の庭前に 舟を 繋ぐ。彼元信五が 百鬼夜行 蕪子瞻六が 癖なりといへ共、亦復議論儒の 腐鯉 脊後の 譏よりは 枉七のゲタくくく(口二オ)

【語釈】

一 毛寶かはなし 亀：毛寶は中国東晋の軍人。白亀を助けた毛寶が、後に石虎將軍との戦に敗れ、長江へ飛び込んだ際、かつて逃がした亀に命を助けられたという放亀報恩譚をふまえる。

二 猪牙舟：屋根のない舳先の尖った細長い小舟。江戸時代、浅草山谷にあった新吉原へ通う遊客が多く用いた。

三 芻兇：草刈りをする人と樵人。

四 百々爺：大きな杖をついた老人の姿で原野に出没するとされる妖怪。

五 元信↓狩野元信：室町後期の画家。狩野派の始祖正信の子。足利家の御用絵師となり、法眼に叙せられた。次代の桃山障壁画における狩野派の画風と活躍の基礎を築いた。妖怪絵巻「百怪図巻」(元文二年(一七三七)、佐脇嵩之)の奥書に「古法眼元信筆 阿部周防守正長写 元文第二丁巳冬日 佐嵩指写」とあることから、元信が「百鬼夜行」を描いた絵巻が存在していたと考えられる。

六 蘓子瞻↓蘇軾：中国北宋の文人、政治家。字は子瞻、号は東坡居士。父蘇洵・弟轍と共に三蘇といわれた文豪。唐宋八大家の一人。古文作家として「赤壁賦」などの名作を残す。詩は宋代第一と称される。

七 柎目↓柎目：まっすぐに通った木目。ここでは、柎目の下駄と、品のない高笑いをあらわす副詞「げたげた」を掛ける。

【翻刻】

みこしわかしゆ
見越若衆

すべてにんげん

凡人間わざならず。其丈六尺有餘大力にして、大食す。

しやかしたけ

釈迦嶽一の山中にすみ、晴天ならされば出づと番附に見

へたり。(口ニウ)

一 釈迦嶽：①奈良県南部、大峰山脈の一峰。頂上に釈迦如来像と普賢・文殊の菩薩像(もと木像)があり、古くから信仰による登山者が多い。標高一八〇〇メートル。

② 江戸時代、明和・安永の頃に大関を勤めた力士。釈迦嶽雲右衛門。出雲松江藩主の抱え力士で、身長七尺余の長身力士として著名。ここでは、常人離れた体軀をもつ②を①に住む化物(見越若衆)に見立てている。「晴天」は、雨天の際、相撲が中止となることを踏まえる。

さきむすめ
驚娘

年七十あまりにして十六七の娘と見ゆると云々。男変じて女となり、娘形化して敵役となり、嫁劫を経て姑となる。形の早かはりじゆうなり。是をみるものくびなが

くなるゆへ、鶯娘といふ。四角な雪ふりに出るといへり
 (口三才)

一 鶯娘：歌舞伎舞踊。長唄。一七六二年(宝暦十二)四月、江戸・市村座で二世瀬川菊之丞が初演。五変化舞踊『柳雛 諸鳥囀』の一節。雪のなかに佇む白鶯の精に託して娘心の妄執を描く。白無垢・綿帽子の嫁入り衣装から引き抜いて友禅衣装の町娘になり、クドキ、手踊、傘踊などを経て、最後は羽または火焰の衣装にぶつ返り、地獄の呵責に苦しむ姿をみせる。女方舞踊の代表作。ここでは、女形役者が様々な役柄を自在に演じることを化物(鶯娘)に見立てている。首を伸ばして鑑賞する観衆の姿と首の長い鶯の姿をこじつける。(口二ウ〜口三才)



於以良武^一

うますめ

いき

一名石女^二或は意気女と云。其術千載の狐^三にまされりと

あふま

ひやくきやきやう

諸書に見へたり。逢魔か時^四より百鬼夜行のうかれ人^五を

すい

そしなかし、よく人の心をさとり、粹の舟をくふ一両大

六

じんのゑり元に取付ぞりかみさせ、引過^七より枕がへし

かたち

おそろ

などして、夜あくれば、容きへ、いろ青さめて怖し。

気のきゐた化ものは引込時分に出る事もあり。おいらん

せうまきやう

だの金中三八を用ひ身じまひ部屋九の照魔鏡^十にうつせ

口三ウ

ば、ばけの皮をあらはすとぞ（口三ウ）

一 おいらん↓花魁：位の高い遊女の称。部屋持ち以上の

遊女にいう。

二 石女：子を産まない女。

三 千載の狐↓千歳の狐：晋の干宝撰『搜神記』卷十二

に「千歳の狐起為^二美女^二」とあり、『文明本節用集』には

「狐寿八百歳ニシテ変為^レ人、千歳変為^二媼婦^二」

四 逢魔が時：暮方の薄暗い時刻。たそがれ。大きな禍

の起こる時刻（大禍時）の意。

五 うかれ人：美しい物や、華やかな事、また、異性に

ひかれて浮かれ歩く人。

六 ぞぞかみさせ↓ぞぞ髪立たせ：全身の毛をよだた

せる。

七 引過：江戸新吉原の遊郭で引け四つの拍子木を打

ったあとの時刻。

八 おいらんだの金中三：「阿蘭陀」をもじって「おいら

んだ（花魁だ）」とし、「○中散」といった薬の名前に、

遊女の好物である「金」と遊女の格の一つ「昼三」を掛

ける。

九 身じまひ部屋↓身仕舞部屋：身じまいをする部屋。

化粧部屋。

十 照魔鏡：悪魔のかくれた本性を写し出すという鏡。

また、人や社会のかくれた本体を写し出すもの。ここで

は、手練手管を用いて遊客を惑わす遊女を化物にたとえ、

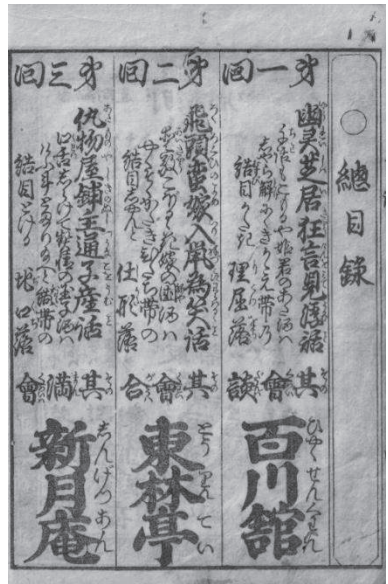
その実態を穿つ。



(口四才)



(口四ウ)



○幽霊貞見世狂言を観て浮む話

なまげ
情一を柳髪二の色に染れは、春の思ひ三乱れ安く、心を
らんしつ
蘭室四の手にうつけせば、秋の露屢脆し。青瓷よし五、平城
みやこさか
の都盛んなる時とかや。妹山小貳国人背山大掾清澄六
といへる二人の武家、封内七を比べ、隣国の因浅からず。
此妹山国人の秘蔵娘浮舟姫と申は、父母隠口八の泊瀬の
観音九にいのりてもうけたる告子にて、美人の(一才)聞
かく
へ隠れなく兼て美男の名に高き、背山清澄の子息薫之

介と幼時より、結髪して約束の期至り、息女已に十六歳、
髡君もはや十八才の角額一〇。背山の方より、婚姻の催足
頻なりけるが、此浮舟姫、玉に瑕と申はまだ物の心しり
給はぬ頃よりも佛の戒律を保ち、あけくれ仏につかへ
参らせて、成仏得脱一二の願より外はなかりければ、両
親にも殊の外、心をいためられ、秘一二の乙女といへる
才發者を附おかれて（一ウ）かれこれ世の綽號なる「三物
かたりに事よせて、髡君の皇雅さ、誠に色男さまく」と
おだて参らすれと、女は五ツの障り一四有て罪ふかき身に
しあれば、たとへ父母の仰にてもかたく殿御の肌はふれ
まじとて、一向尼道心の御望にて、仏間にのみ閉籠て
おはしければ、婚姻の義、只何となく病身のよしにて、
延引のおもむき背山の方へ申越ければ、大掾大に憤り、
扱は娘のきりやう自慢して、女御后にもそなへん（二オ）
と思ひ此方の家柄不足にて、病氣といひ立事を延引と覺

へたり。一旦、武士の約束して、変改常のならひ迎、そ
の俣におくべきや。よし／＼此上は姫が病の実否を正し、
事によらば首にして持来れ、と家の執権一五穂積監物に
使者の旨申付らるれば、監物いそぎ妹山の館に至り、婚
姻とり結び下さるや、首討て渡さるゝやとにがり切て述
ければ、小貳ほとんど此返答にあぐまれ、姫が發（二ウ）
心一六得道一七の事をいひあかし詮ずる所、娘が首討て立
身を望ぬ心底をあらはすべしと、弥一八菩提所一九におゐ
て、首討使者に渡さるへきに極りけるは、無慙といふも
愚なり。いたはしや浮舟姫、却てあの世へ行かん事の
嬉しきよとて、常よりもいそ／＼と最期の用意濃に、
已に其日になりぬれば、菩提所の白洲の敷革の上に座し
給ひ、兼て覚悟の御事迎、雪光院釈妙操大姉と導師に
戒を受けり、読誦二〇の御声（三オ）しとやかに、
妙法蓮華經三觀世音菩薩三・普門品三三第廿五、尔時無

尽意じんい并びやう即すなはち從じゆ座ざ起き偏へん袒たん右う肩けん合が掌しやう二に四しの玉たまの姿すがた二に五ごの清きよらか

に、けふを限りりの法りの花はな三さん六ろく、経きやう文もん取とて座ざし給たまへば、後うしろ

に太たい刀とう取と、前まへに檢けん使しの穂ほ積せき監かん物ぶつ、首くび桶づき携ひかへ扣ひかへたり。已い

に読よ誦じゆもおはれば、監かん物ぶつ謹しんで姫ひめ君きみに打うち向むかひ、遠とほ大だい守しゆの

御おん息そく女にや、適あつ健は氣けの御おん覚かく悟ご。改か申まをに及およはね共ども、我われ主しゆ人と

御おん縁えん組ぐみ取と結むすびしは十じゆ年ねん以い前ぜん、夫この方かた以い来きた、御おん興こう入にを急いそげ共ども、

打うち捨す置をかれ、其その俛みづかに差さ(三さんウ)置おては背せい山さん家けの武ぶ門もんのか

きん二に七しち。去すいに依いて、今すい日じつ推すい參さん二に八はちいそぎ御おん首くび給たまはらんと申まを

せば、父ちち小せう貳に貳に御おん声こゑくもり、ふびんには思おもへども、武ぶ家け

の格かく式しきいさぎよく相あ果はて、世よの口くちを塞ふさぐべし、と詞ことばは

はげしき御おん目めになみだ、折つから御おん局きやうの願ねがひによりて、

秘ひ婢めい二に九く茶ちやの間ま三さん〇まるまで、御おん名な残ざんを申まを上あげ、みなく泣なし

みづいて、悲ひ嘆たんの袂たもとをじほりあへず、斯かくては果はじと時じ刻こく

うつれば、太たい刀とう取と情じやうなくも姫ひめの御おん首くびを討う参まをれは、皆みな(四しオ)

居ゐたりける。さしもの監かん物ぶつ矢や長なが心こゝろ三さんも弱よくなりて、是こゝろ悲かな

なく御おん首くびを給たまはり、主しゆ人の館ゐへ立た帰かへり、右みぎの次つぎ第だを申まを、

姫ひめの首くびをさし出だせば、若わ殿てん薰かほ之の介けどの、不ふ便べん胸むねにせまつ

て、狂きやう氣きのごとく互たがひに親い々なの云い号ごう斗たうにて、存ぞん生じやうの内うち

見みる事ことなく、今いま儂はかなき対たい面めんいかなる惡あく縁えんを結むすびし事ことよ、

となくく姫ひめの顔かほを見み給たまへは、こはいかに、痘あ跡あと・副ちん金きん彫ぼり

三さん二ににひとしく、羽は生ふの累かさね三さん三さん平へい二に満まん三さん四しの醜しこめ女によ、ふきり

やう(四しウ)此こゝろ上うなかりければ、薰かほ之の介け、再ふた(マ)再まひ驚きやう天てんし、

さては、幼よう稚ちの美う人じん、かゝる痘も疹が三さん五ごに面かほ変かはりけるを耻はぢ、

病びやう氣きといふて婚こん礼れいをのばしけるを無む慙ざんにも首くび討うし事ことよ、

それならば殊まさ更さら不ふ便べんの事こと。其その心こゝろ根ねの程ほど、いかなる美人びやうじんに

も優まされるものを残ま念ねんの次つぎ第だなり、と猶れん恋こゝろ慕ぼの想おもひひやまし

巫まじ女によ廟ぼうの花はな三さん六ろくは夢ゆめの中なかのこり、昭せう君くん村むら三さん七しちの柳やなぎは雨あめの

外ほかに疎そなる心こゝろ地ぢして、此こゝろ恋こゝろ我われ身みの善ぜん知ち識しき三さん八はちと無む常じやうの觀くわん

念ねん起きり、せめては姫ひめが後ご世せの為ためと、回くわい国こく三さん九く修しゆ行ぎやう(五ごオ)

のおぼし立た。大だい守しゆの若わ殿てん浅あましき六ろく部ぶ姿すがた四し〇まるとなり、密ひそかに館ゐを忍しのび出だらるゝ。頃ころは三さん冬とう二にたつ始はの空そらなれば、

ふり見ふらずみ、時雨もたえず、嵐にきほふ四木の葉さへ、涙と共に乱つゝ、ことにふれかなしけれど、風に櫛り、雨に沐し北陸山陰を経て、山陽道に打越、又和州に渡り、城上郡佐野の渡りに到る。時しもあれ、此所こそ、京極黄門、駒とめて袖打はらふかけもなし佐野へ渡りの雪の夕くれ、と詠じけんも思ひ出(五ウ)され、頃しも大雪頻りに降つもり、さながら晩冬の景色かな。見れば、とある木陰に青塚あり。誠や一樹の陰も多少の縁とかや。こよひはこゝに明さばやと、笈仏の扉を開き、御燈を點して、一炷の香を拈じ、わけてこよひは、姫が百ヶ日の対夜。雪窓院釈妙操大姉頓証ぼたいと回向五三の声もかきくるゝ時に、いづくなるらん、さも殊勝なる鉦の声す。薫之介心耳を澄し、扱は我にひとしき修行者の此雪道に迷ひ(六オ)くるならんと、時うつれ共、鉦の音は猶塚の邊に聞ゆれば、

あやしみ雪をはらつて見れば、妙操尼入定五四塚と彫有。薫之介、大に驚き杖を以て塚を堀穿つ事、一丈あまりもし、異香薫して、忽然見る天上無双五五人間有二の美人いと末若きそぎ尼五六のうづ高き五七上臈五八白綾の大振袖にうつぶしの袈裟五九をかけ、端坐合掌して眠るがごとき其顔に、薫之介、恍惚となつて、倚に居よりつゝ、君は正しく俗名浮舟、法名妙操(六ウ)尼なるや、といふ声、耳に通じけん、此姫仄に芬芳なる六〇目をほそめ、是なる男を見れば、こはそもいかに、気高き殿御の六部姿。内裏雛の化身か、頭はわらの草たばね、月代六一のびて黒びろうどのごとく、雪に対して光かなる容態の端正しさに、なんぞはづかしからざらん。はじめの流盼(兼十兌)笑に目もうるめば、こなたも又十分のいろをふくみ、互に見入見とれしは、雪と共に消る心地なり。姫や、有て、みづからが俗名戒名まで御ぞんし(七オ)有

こそ疑うたがひもなひ、云号いくなづけの殿御、薫さまにてましますか。
何故なにがの此御姿、おなづかしや六二と取すが縫ぬいれば、こなたも更さらに夢ともなく幻うつつとも又わきまへがたく、其浮舟こそ我を嫌きらひ、首を討はれて果はしかば、其為かゝる修行の立た立、然しかるにそもじか浮舟といふ様子、いかにと不審しんすれば、泪なみだはらくとくだり、さほど迄、自みづからを思ふて給はるお心根うれの嬉うれしさよ。夫に付ての我身の懺悔ざんげ。自みづからになり替り、百日以前に首をうたれ(七ウ)しは、秘こし乙女と申もの。其日、みずからは此所に入定の願とげひ遂ながら、臨終りんじう正念しんねんの際きはにのぞみ、現世げんにて秘共がうつくしと噂うはさせし殿御の御顔、不図と一目見たひと胸むねにうかみしが、輪廻りんゑとなり、わたしやおまへさんに迷まよふて、此百日か間死もやらず、土の中で恋こがれ存生居まがらへたも宿世しゆくのゐんゑん。仏の罰ばちより、あなたの罰、はじめての御目もじ今更はづかしけれど、いづくいかななる方へなど、つれてのいて給はれと、なみだ(八才)ながらの物語。始終しじうを聞て薫之介、盡つきせ

ぬ縁と悦うたひの中を隔へる妹背山。今此時の奇遇きぐう也けり。斯かて、一ト先人里ある方へ伴ともなはんと立上れど、寒光凛々かんくわうりんとして肌はだに徹てつし、雪風にこぼえる手元暖あため合ひ、遥はるかなる一ツ家の燈火を目あてにたどり付、是は夫婦の者なる。夫は武者修行、妻は哥枕まくらの行くらしたる同行二人、一夜の御無心申たしと云入れれば、内より齡七十あまりの道心立出、野情風月やじやうふうげつ廣く山心人事疎さんしんじんしそなる(八ウ)菴いほの内、いざ入給へと草とほその扉をひらひて内に請せうし、今宵は仏の百ヶ日の対夜たいなれば、夜もすから回向えかうしてたべ、とて粟あはの飯を焚たいてねんごろにあしらひ六三、見ますれば只ならぬ御方、餘義よぎなく宿は参らすれ共六四、此所は三輪わが埼六五と申、領主方の掟をきてきび厳げんければ、宿の断ことほりの為、庄屋方迄御出あれとて薫之介を伴ともなふて出行ぬ。跡は姫君只七人、嵐はげ烈しく吹すさひて、壁かべの破やぶれより降吹して、草竹簀ゆかを貫つらぬて生お生い繁しげり、囲炉裏いろりの火さへ(九才)消きさりて、窵くらき四隅すみ

の見廻はされ、煤たる仏壇の灯火幽に消かり、あや
しやいろ青ざめたる女一人彷彿ほうぼうとして、姫の前にかし
こまりて、さめぐと泣なく。さすが得道とくだうの女、義とて六七澹
然ぜん六八と懼れ給はず、念仏申て其顔をつれく眼みつめ給へ
は、わが身替りに立し六九姫の乙女なれば、こはいかにと
声をかけ給へば、お久しや、お姫さま。此家はわたくし
が親里、さきのは実のてゝ親七〇。百ヶ日の対夜に思はず
お逢申あいも、主従三世の御縁七とやら、御みや（九ウ）づ
かへの其中に御目かけられし御恩おんの程、死んでも恨うらみは
ござりませぬが、存生ぞんじやうの内思うちしましたる事、たつた一つ
閻浮えんぶ七二の迷まよひとなり、まだ浮うかまずにおります、と血ちのな
みだをながせば、姫君ふびん胸にせまり、さほど忠ちゆう心しん無
二のそなた、思ひ残せし事ありとは、何が迷まよひ何が望ぞみ、
いかやうなる追善供養ついでんくやう七三も命の親七四。願ねがひの事、聞きひで
わいな七五。何なり共ともいやいの、と問詰とひめ給へは、幽霊ゆうれいさも
嬉うれしけにへアノ顔かほみせ七六が見たふござります。（十オ）

【語釈】

- 一 情：情趣、風流を理解する洗練された心。男女が惹かれ合う心。恋心。
 - 二 柳髪：女の髪長くしなやかで美しいさまを風になびく柳に例えた語。美人の髪。
 - 三 春の思ひ：春の日の物憂い思ひ。
 - 四 蘭室：良い香りのする部屋。立派な人の居室、また婦人の居室にいう。ここでは蘭室にいる婦人の意か。
 - 五 青盜よし青丹よし：「奈良」にかかる枕詞。
 - 六 妹背山小貳国人 背山大掾清澄：『妹背山婦女庭訓』三段目「吉野川」における大和背山の領主大判事清澄と妹山の大帝の後室定香（定高）を踏まえるか。
- * 『妹背山婦女庭訓』：（人形浄瑠璃。近松半二・松田ばく・栄善平・近松東南・三好松洛合作。時代物五段。一七七年一月大阪竹本座初演）藤原鎌足の蘇我入鹿討伐に大和地方の古伝説を織り込んだ作品。同年歌舞伎に移され屈指の人気狂言となった。
- 〈三段目「吉野川」のあらすじ〉吉野川を挟んで、大和の妹山は太宰の領地、紀州の背山は大判事の領地。それぞれの仮屋に雛鳥と久我之助が住んでいる。二人は互いに恋心を抱いているが、親代々不和のため、親しく語る

こともできない。そうした中、入鹿から、服従のしるしに大判事は息子を出世させ、定香は娘を側女として差し出すよう命じられる。義と操のため、久我之介は切腹、雛鳥も母の手にかかり、互いに恋人の無事を祈りつつ死ぬ。親同士の不和は解け、ともに入鹿討伐への協力を誓い、定香は娘の首を雛道具に乗せて川に流し、大判事の元へ嫁入りさせる。

七 封内↓領分：領有している土地。領地。

八 隠口の↓隠りくの：地名「初瀬」にかかる枕詞。

九 泊瀬の観音↓初瀬の観音：奈良県桜井市初瀬にある真言宗豊島派の総本山、長谷寺（初瀬寺）のこと。本尊の十一面観世音菩薩は平安時代には、貴族、特に女性
の信仰が厚かった。

一〇 角額：角前髪にした額。角前髪は江戸時代、十四歳になった少年が前髪を立てておきながら額の生え際通りに髪を剃り、額を角ばらせた髪型。

一一 成仏得脱：仏教修行の結果悟ることができて煩悩から脱すること。また死んでこの世の苦しみから解放されること。

一二 妃↓腰元（腰本）：貴人・大家の主人の傍近くに
つかえ身辺の雑用をする女。

一三 綽號↓婀娜：色っぽく洗練されているさま。

一四 五つの障り↓五障：仏語。女の身に備わる五つの障礙しょうがい。梵天、帝釈、魔王、転輪聖王、仏身になれないことを言う。

一五 執権：江戸時代、大名・小名の家臣で、家の事務を総轄した職。

一六 発心：発心は発菩提心の略。仏陀の悟りを得ようとする心を起こすこと。求道の念を起こすこと。

一七 得道：仏道修行をして悟りを開くこと。

一八 弥いよいよ：状態を意味する語について程度のはなはだしいさまを表す。

一九 菩提所：死者の冥福を祈る場所。菩提寺のある所。

二〇 読誦：仏語。声に出して経典を読むこと。読経。

二一 妙法蓮華経：大乘経典の一つ。法華経のこと。

二二 観世音菩薩：大乘経典の代表的な菩薩で仏教の慈悲の精神、すなわち仲間に対する友情と悩めるものに対する同情とを人格化したもの。

二三 普門品：法華経第八卷二十五品の観世音菩薩普門品の別称。観世音菩薩の名を受持することの功德をこの菩薩が三十三に身を変えて世の人を救うことを説いたもの。

- 二四 尔時無尽意井即從座起偏袒右肩：普門品の冒頭「尔時無尽意菩薩・即從座起偏袒右肩合掌向仏而作是言世尊觀世音菩薩・以何因緣名觀世音菩薩」(その時無尽意菩薩は即ち座より起ちて偏えに右の肩を祖し、合掌をし、仏に向いたてまつりて、この言を作す。『世尊よ、觀世音菩薩は何の因緣を持つて觀世音と名づくるや』と)を踏まえる。偏袒右肩は、僧が相手に恭敬の意を表す袈裟の着方。右の肩を脱ぎ、左肩のみを覆うこと。
- 二五 玉の姿：玉のように美しい、また素晴らしい姿。
- 二六 法の花↓みりの花：仏法の高貴さを花にたとえて言う語。
- 二七 かきん↓瑕瑾：恥、辱め、名折れ。
- 二八 推參：招かれていないのに自分から押しかけていくこと。
- 二九 婢：女の奉公人。女中。
- 三〇 茶の間：武家で茶室の雑用をつとめた女。
- 三一 矢長心↓彌猛心：勇みに勇んでものおじしな心。堅固でくじけない心。
- 三二 副金彫：工具のたがねを金槌で叩きながら金属面に彫刻を施していく彫刻の一技法。
- 三三 羽生の累：下総国羽生村の百姓と右衛門の妻。醜

- 女で嫉妬深い性格のせいで夫に殺害され、その怨念が一族にたつたが、祐天上人の祈りによって解脱したという因縁話の主人公。
- 三四 三平二満：おたふく。醜女の顔を例えて言う語。
- 三五 痘疹：疱瘡。天然痘。
- 三六 巫女廟の花：巫山の麓の神女廟に咲く花。
- 三七 昭君村：中国湖北省荊州府歸州。元帝の官女王昭君の生地。
- *『白氏文集』卷一七の「巫女廟花紅似粉 昭君村柳翠於眉」を受け、『和漢朗詠集』(一〇一八年頃)上、柳の部には同じ詩「巫女廟の花は粉よりも紅なり 昭君村の柳は眉よりも翠し」が収められている。
- 三八 善知識：人を仏道に導く機縁や機会となるもの。
- 三九 回国：諸国をまわって歩くこと。
- 四〇 六部姿：全国六六か所の霊場に一部ずつ納めて回るために書写した、六六部の法華経を納めて回る行脚僧の装束。室町時代に始まり、江戸時代には、僧侶のほかに、鼠木綿の着物に同色の手甲・甲掛・股引・脚絆をつけ、仏像を入れた厨子を背負って、鉦や鈴を鳴らして米銭を乞い歩く者もいた。
- 四一 三冬：冬の三か月。孟冬(陰曆一〇月)・仲冬(陰

曆一月・季冬（陰曆二月）の総称。「三冬たつ始め」とあることからここでは、十月初めのこと。

四二 きほふ↓競ふ…勢い込んで先を争う。

四三 風に櫛り雨に沐し…風雨にさらされて、ひどく苦勞をする。さまざま苦勞を体験することという。（『莊子』天下）の「沐ニ甚雨一、櫛ニ疾風二」による）

四四 和州…大和国の異称。

四五 城上郡佐野の渡り…「城上郡」は現在の奈良県。

「佐野の渡り」和歌山県新宮市の佐野の渡し場をさし、当時この地域は大和国であった。

四六 京極黄門…藤原定家のこと。

四七 「駒とめて…」↓藤原定家の「駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮」『新古今和歌集』（巻第六冬歌）を踏まえる。

四八 一樹の陰も多少の縁↓一樹の陰も他生の縁…知らぬ者同士が、雨を避けて同じ木陰に身を寄せ合うのも、前世からの因縁によるものということ。

四九 笈仏…諸国の神仏を巡拝する者が背負う厨子入りの仏像。扉を開いて後方から礼拝できるようにになっている。

五〇 拈んず…香をひねり焚くこと。

五一 对夜↓逮夜…忌日の前夜

五二 回向…読経や念仏など、善根の功德を死者に手向けること。死者の冥福を祈って読経をしたり、念仏を唱えたり、供えをしたりすること。ここでは「一晚中冥福を祈り供養する」の意か。

五三 心耳をすます…心で聞くこと。平常心。

五四 入定…禅定・無我の境地に入ること。また聖者・高僧の死。

五五 天上無双…天下第一で、並ぶもののないこと。

五六 そぎ尼…髪を肩のあたりで短く切りそろえた髪型をしている尼僧。

五七 うづ高き↓堆い…気品がある。高貴である。

五八 上臈…貴婦人。特に若い女性を敬っている。

五九 うつぶしの袈裟…白膠木の枝から取れる五倍子で染めた薄黒い色の袈裟。

六〇 芬芳なる…つやつやと輝くように美しいさま。あたりに照り映えるように美しいさま。また、人が、内側からの魅力があふれてくるように美しいさま。

六一 月代…中古以来、男子が冠の下にあたる額ぎわの髪を半月形にそりあげたもの。

六二 おなづかし↓なつかし…心惹かれる。親しみ寄る。

お会いしたかった。

六三 ねんごろにあしらひ…丁寧にもてなす。

六四 餘義なく宿は参らすれ共…異論なく一晚の宿を提供しますが、の意か。

六五 三輪が埼…和歌山県新宮市三輪崎のこと。近くの「佐野の渡り」とともに、歌枕。

六六 彷彿…影のおぼろなこと。姿、形がかすかであるさま。

六七 義とて…未詳。ここでは「当然」の意か。

六八 澹然…あつさりとしたさま。また、静かなさま。

六九 わが身替りに立ちし…私の身替りになった、の意。

七〇 てて親…父親。

七一 主従三世のご縁↓しゅうじゅうは三世…主従の関係は、現在よりもとより、過去にも未来にも因縁が深いということ。「親子は一世」「夫婦は二世」に対していう。

七二 閻浮↓「閻浮提」の略。閻浮提…仏語。須彌四州の一つ。須彌山の南方海上にある大陸。南瞻部洲ともい

い、もとインドの地を想定したもので、のちに人間世界、現世を意味するようになった。本文中の「閻浮の迷ひ」

は「この世での迷い」の意。

七三 追善供養…死者の冥福を祈ってする供養。追供。

七四 命の親…命を助けてくれた恩人。また、命をささえてくれるもの。

七五 聞ひでわいな…ここでは「聞き入れないわけがないでしょう」「聞かないではいられません」といった意か。

七六 顔見せ↓顔見世狂言・顔見世芝居の略。顔見世芝居…一七世紀中ごろからはじまった歌舞伎年中行事の

一つ。江戸時代の各座は一〇月に一年契約で役者その他の入れ替えを行なったが、一月から新加入の役者を加えて一座総出演で行なう興行をいう。顔見世興行。

㊦ 飛頭蛮の嫁入鼠に笑はるゝ話

ろくろくび よめいりねつ わら
げんをろくわうてい

むかし、玄宗皇帝の時代には、万民女子をもふくる吏を

たつとひけり。其ころ楊貴妃といふ評判娘を持って、

馬嵬が原一の裏店に偽媒女と云婆が口入、玄宗へ妾奉

公に出し、それより身内うかみ上りて居候の楊国忠が

俄大身三になりしをうらやみ、欲から女子をうむ事を

悦ぬ。いかさま軽き者は、よく稼く男の子をもたふよ

りは、中くらみな娘の子をもてば、思はぬ両親(十ウ)

の仕合ともなる事なれば、娘をしるもの^四にするも又に
くからず。爰にみやこ三条通りに蔵造とつしりとした、
薬種袋^{しゆ}福屋富右衛門といふ有徳人^{うとく}五のひとりむすこ、け
ふも嵯峨野の桜狩、花ば見すに見られに行くは、今の世
の人心にて、見帰る多くの女中の中に、むかし鹿子^{かのこ}六に金
糸のぬひ紋、ふり袖のちいさきを其まゝ着せて、年は十
六七と見へて、人から七の娘極上上八本面屋^{めん}九風俗しやん
として、仇め^{あた}かざ、さりとは(十一才)万そろふたる生
れ付、母おやらしき人、いく度かせんたくせし布子^{ぬの}着て、
娘の尻^{しり}に付て、供して通るを彼むすこ、見初てしきりに
なづみ、供の手代を跡から付て、宿元一〇を見させけるに、
錦小路^{にしきこうぢ}のうら店^{たな}かりて、売卜^{ばいぼく}二に其日を送る平岡^{へら}右内
といふ牢人^{らうじん}ものゝ娘、親子三人うき年月をおくるよし、
つぶさに聞て歸りて物語すれば、忤^{せかれ}が目に付たものな
らばと親父^{しんぶ}手代共に申付、万事こなたよりこしらへさせ
て、むかひ(十一ウ)とりたき望み思ひ入て段々云つか

はしければ、右内聞とゞけて娘を福屋方へよめらするに
極り、福屋の家内、婚禮の仕度に取廻の折から、三枚^{まひ}が
た二三のかんばん^{いしや}医者、乗物見世^{のりもの}さきに立させ、悠々^{ゆう}と立
出る。其人体歴^{にんていれき}々の大医^いと見るより、手代勘八頭^{かんとく}をさく
れば、身共は長崎より当地へ参り、堀川通りにおつて、
難病^{なん}を療治いたすに付、ちと求^{もとめ}たひ薬種有て参つた。く
るしふなくは通しめされ、とあるに奥へ通し、ていしゆ
(十二才)富右衛門もあいさつすれば、扱^{あつか}めたいと申
薬は、秋石^{しうせき}一三と人魄^{にんぱく}一四右二色^{うにいろ}がもらひたいといへは、て
いしゆ不審^{しん}し、秋石と申は、童溺^{どうなう}一五を秋の露^{つゆ}に交、石膏^{せきかう}
を以て製法^{せいほう}いたせば、拵^{しゆ}薬^{やく}の中でもすんど一六むつかし
く、又人魄^{にんぱく}はとりわけてたしない一七ものなれども、前々
より嗜^{たしな}おりまするが、惣^{ひやく}たい秘薬^{ひやく}を商ひまするにはお
所を尋、又は病の様子を聞たうへ売^うまするが薬やの習ひ、
其遣^やひかた、病気のやう躰^{たい}お聞かせ下されいと尋れば、
療治は家の(十二ウ)秘伝^{ひでん}、病^{ひやく}症^{しやく}の事は遠慮致せど、

申さずはなるまひ。必他言は無用。御内証も聞れいと声
をひそめ、所は錦にしきの小路にさる浪人の娘でござるが、き
りやう一八は十人並一九にすぐれ、発明はつめいで器用きやうで、ことし十
七才、此度去ルれき歴々よりきりうのぞみにて、百兩の仕度金
で嫁の契約けいやくいたしたれ共、情なひ事は、かの娘飛頭ひとうはん蜜みつ二〇
と申病がござる。俗にいふ轆轤首ろくろくび二一。何とぞ療治いたし
くれとの頼み。百兩と申結納たのみを取つた賀の方へ聞へ（十
三才）ては事のやぶれ。近ころ不便にぞんし、明日より
療治にかゝるはず。夫故調へにまいつた。二味にまい三明朝ま
でに製法頼入る、と金子老両手附に渡し、くれぐゝ口を
とめて、乗ものいそがせ帰りける。跡に夫婦興をさまし、
早速勘八を遣はして、様子をさぐらするに錦の小路に浪
人といふは、平岡右内より外になきよしなれば、弥あき
れはてながら、是迄かくし包つじんた病、白地あからさまにいふも殺生せつせう。
親達の身になつてもいとおし、殊に金渡したは跡月つき三三。
何かの（十三ウ）仕度に入て手には有まい。祝言の日を

けふかあすかとまつ所へ金戻せといわは、生死しじにならふ
もしれず、貧まつしいを合点がつてんで仕拵しじらへに遣つた金、変改へんがへばかりで
金の事は俵まにしたがよかるべし、と夫婦相談の中の間へ、
小栗軍兵衛くりといふ出入屋舗の侍、金の無心にとくより来
て居けるが立出、其錦の小路の浪人といふは、平岡右内。
殿の御国に勤め娘に異病の有る事よく存おる。御病氣を
蒙りし右内が娘、ろくろ首でない逆も縁組めされば、
殿への出入はなるまし（十四才）先刻も申入た身か無心、
畢竟ひつきやう二四殿の御用も同前、其御用金は不商あきなひなどゝすべ
らかし、取かへすへき金取かへさぬ有金ゆうありながら、
必竟ひつきやう身どもをふみ付、殿の御恩をわすれた富右衛門、百
兩の金子取戻もとして身共へさつそく渡さすは、殿の御出入
をとめるがと富右衛門ねぢられ、むやくしくおもへども、
大切の出入にはかへがたく、氣の毒ながら、変改へんがひ并びに二五
金子取戻し參れと勘八に申付けば、軍兵衛はにがり切て
勘八と同道し、表へ立出しが、道々身共国から（十四ウ）

惚^{ほれ}た右内か娘一年百両にて困^{かこ}はんといふを得心^{とくしん}せぬ上
つら耻^{はぢ}かゝせた意趣^{いしゆ}がへし、首尾^{しゆひ}よくみてむまひく猶
此うへ勘八万事頼むぞと呶^{さいや}き、點^{うなづ}き行所へ、以前の医
者、誠はぐわんにんぼうず^{二六}にて、素肌^{すはだ}に破^{やぶ}れ衣^{ちやぐ}を着
し、横鉢^{よこはちまき}卷^{二七}に納太刀^{二八}をもち、二人をみるより太刀を
打^うふり、褒美^{ほうび}の金すつぱりとはらつてくれく、シイ。

【語釈】

- 一 馬嵬が原…中国陝西省興平県の西の地名。馬嵬坡。
唐代、安祿山の乱の際、玄宗に従つて蜀に落ちのびる途
中の楊貴妃が殺された所。
- 二 偽媒女…未詳。偽の女官または偽の仲介役の女と
いった意味か。
- 三 俄大身↓俄大尽…俄分限に同じ。俄分限は、にわか
に大きな利益を得て、大金持になること。また、その人。
- 四 しろもの↓代物…金錢に換えることのできる品物。
商品。
- 五 有徳人…富裕な人。金持ち。
- 六 鹿子…鹿子絞の略。鹿子絞は絞り染めの一種。布を

結びしばって染色し白い斑点模様を染め出す。桃山・江
戸時代に全盛した。三纈の一つ。

七 人から↓人柄…品格のよいこと。また、そのさまや、
よい品格をそなえた人。

八 極上上…極上上吉。役者評判記の位付けの一つ。上
上吉より上位で、芸の位を極めた特にすぐれた役者に与
えられた。また、他の評判記類にも用いられた。

九 本面屋…本面をあきなう店。本面は、張り子の面な
どに対して、木を掘つて本塗りした面。本塗りは、省略
しないで本式に塗ること。また、その塗り方。ここでは、
娘の容姿の美しさを表現するか。

一〇 宿元…住んでいる所。自宅。

一一 売卜…金錢を受けて占いをする事。

一二 三枚がた↓三枚肩…(二人でかつぐのを二枚肩な
どというのに対して)一挺の駕籠を三人でかつぐこと。

一三 秋石…薬の名称。秋石は人尿成分を人工的に固体
の形で採取したもの、及びその贗造品である。一〇六一
年に沈括が製造した記録があり、昇華法その他を利用し
人尿から男性ホルモンを取り出していたとみられる。今
日、秋石と称する漢薬には、人尿から生成した人中白を
加工して製する淡秋石と、安徽省桐城を主産地とし塩水

を加工して製する盆秋石とがある。両者とも強壯強精薬とし、肺結核・咳嗽・遺精などの治療に用いる。

- 一四 人魄：薬の名称。李時珍の『本草綱目』（一五九〇）を訳した『國譯本草綱目』（第一二冊、一九七七年）には「時珍曰く、これは縊死者の直下にある麩炭のやうなもので、即時に掘り取れば手に入るものだが、やや遅れると深く入つて了ふものだ。掘らずに置くと必ず再び縊死者を出す。蓋し人は陰、陽の二氣を受けて形體を合成し、魄、魄が聚つて生るのであつて、散ずれば死ぬ。死ねば魄は天に昇り、魄は地に降るのである。魄は陰に屬し、その精が沈淪して地に入り、化してこの物となるのだ。やはり星が隕ちて石となり、虎が死ぬと目光が地に墜ちて化して白石となり、人血が地に入つて燐となり碧となるやうな關係である」とある。
- 一五 童溺：秋石の材料。『國譯本草綱目』秋石の項には「秋石は、秋期を須つて童子溺を取り、毎缸に石膏末七錢を入れて桑條で攪ぜ、」とある。
- 一六 すんど↓すんど…程度、時間、距離などの隔たつてはなはだしいさまを表わす語。きわだつて。非常に。
- 一七 たしないもの…稀少なもの
- 一八 きりやう↓器量…顔だち。

一九 十人並…人並み。一般の人と同様。

二〇 飛頭蛮…首が非常に長く伸びる蛮人。ここでは、人がろくろ首となる現象を指すか。

二一 轆轤首…首が非常に長く、自由に伸び縮みする化物。奇病。

二二 二味…二種類の薬を指す。

二三 跡月…先月。

二四 畢竟…つまるところ。結局。

二五 并に…ならびに。ともに。


二六 願人坊主…江戸時代、都市に流行した僧形の乞食。時と所により種々の形態があるが、加持祈祷などをして札などをすすめた俗法師とも、人に代わつて祈願や水垢離などをして銭をもらつて歩いた者ともいわれる。

二七 横鉢巻…鉢巻の結び目を頭の横で結ぶこと。

二八 納太刀…祈願することがあつて、神社に太刀や木太刀を奉納すること。また、その太刀や木太刀。

○其二（十五才）

紙代板行代か四文、御ろうじろ一く。所は錦の小路にしき こうち二ほんてん弁天長屋と申は路次口に、紙くずひろひ入へからずの札

とならべて、 (ちてんたい) 三周易四十八變五平岡右内

と宿札打たる大長屋の突あたり井戸雪隠六と相ならひ、

芥溜七の狭虫、竈の油虫、いつも這うてふ九尺二間の

侘住居八、父は日暮より橋の袂に出て、男女相性縁談取

組の吉凶はうらなへ共、我子の身の上はしらず、母は明

店九の薪二腰うちかけ雇洗濯はすれ共、娘に正月の着が

へなく(十五ウ)親子三人礼義正しく長屋附合尤かたし。

隣の東補塞のお菜、向ふへ御無心ながら糠と引かへに

来る娘は、もじの何某とかや。こなたの噂はちと横櫛の

ひねり者二〇。小間物売、店者の湯かへりを引入て、月に

かすりはどでごんす二一、大酒飲、みな是亭主上手にまみ

へん事を欲する者共なり迎、右内かたく娘に制禁して湯

へ迎も附合せねば、娘は二階にのみ居て月三野の摘木綿

のぬり桶と差むかひ、畳格子より見おろすながし(十六

オ)元の狗の椀なる蛇の貝の片思ひ二二なりし。されば、

孝心天の感ずる所、思ひがけなき福やより結納の事すみ、

近々婚礼のよし、いづれ女の物嫉とて、米とぐ山だしの

下女一三は手桶の姿見一四に鼻低きを恨み、閑所一五へく

る噂は、右内が内を見入て一六娘の鼻の高きをにくみ、井

戸端にあつまりて、よくいひあしくいふ、昼さかり紙く

ずかいの声高く、右内が内をさしのそぎ、溜りはなきや

と上りはなにかけ有紙くずかごを取て目に(十六ウ)か

け、代錢百文に直をして、荷籠を辻一七に置来りしとて紙

くずをあづけて出行ぬ。かゝるはしたなき事も娘が見納

じやと親子笑を催す所へ、彼手代勘八来りければ、

追従一八ぎらひの右内、それお茶よ御酒よと饗し、大き

ふ見へてもおろかな娘、万事此上おたのみ申、先づ日なら

はいつ日ぞと尋れば、勘八類面つくり、主人申すは、

気のどくながら、縁邊一九変改二〇申間二二、先達て進ぜま

した百両の仕たく金只(十七オ)今おかへし下さるべし

と、にべもなく三三いへば、右内驚天し、約束変改常の

事なから、瘦浪人の某が娘、御気には入まひ。御無用と

再三さいさん辞退じたいいたしたを仕度金迄、いやといふをむりにさし越こし、今更いまさらの変改訳へんかいやくが有あふ。いわれいと額ひたいに青あおすじ。いかにも訳やくと申まをは昨日けふ、店みせへ仁躰しんたいな三三さんさん医者いしやが秘薬ひやくを買かひに來きて申まをは、こなたの娘御むすめろくろ首くしゅじやといふ事こと、初はつて聞驚きんきやう入いました。こなたと名なざしはせねども、夫おとこそといはぬばかり、近頃きんごう二笑止にせうし三五さんご(十七ウ)な事ことなから、ろくろ首くしゅ懇望こんぼうにこさらぬゆへ、変改へんかいいたすと詞ことばをたくみに物語ものごとるを聞きて、右内興けうをさまし、その又また医者いしやはいつくの者もの。はてそりやどこのものやら、唐たうのものやら門通かどどりを相手にいたす商人しやうじん、見世名みよなも所ところもしらぬといへは、扱あつかは娘むすめか身共みどもに意趣いしゆ三六さんろく有あやつつの所為しわざかと夫おとこの転倒てんたう、女房にようばうはとりのぼし、此上こゝ五十日ごじゅうにち百日ひゃくにちでも娘むすめを御預ごよりなされ、とつくためし見た上みで、別条べつじょうなくは、其上そのかみで祝言しゆげんをさせて(十八才)下されと涙なみだに声こゑもふるはれて、勘八かんぱちを頼たのめば、五十日ごじゅうにちは扱あつか置お、一夜ひとよでも怖こはひく畢竟ひつぎやうこれは、縁ゆかりのなひといふものなれば、百両ひゃくりやうの仕つかたく金かね、只今ただいまうけとりましたいと

段々だんだん声高こゑたかくに催足さいそくすれば、さしもの右内とうわく当惑とうわくし、なるほどくそふあれば、戻かへしたひ物ものなれ共ども、仕度金しどかね連遣れんせんはされた金かね、衣類いり手道具てだうぐに入いり、残のこつた金かね連遣れんせんはこさらぬ。御勝手かたて変改へんかいなざるゝ娘むすめ、此方こゝも勝手かたてに戻かへし申まをさふとて当然しやうぜんの理ことに、勘八かんぱち負腹まけたち、しからばその拵こしらへた(十八ウ)諸道しよだう具衣類ぐいり持もつて行いと立上たてあれば、右内とうわく、襟えりかみ両手りやうてにつかみ、今浪人いまなみのりなればこそ、素町人すぢやうじん二七にじちと縁ゆかりを組くめ、婚姻こんいん材さいを論ろんずる二八にぱち夷あひす二九にじゅうめら金子かねこは今夜中こんやちゆうにととのへもどしくれふ。慮外りよくわい三〇さんじゅうの守銭奴しゆせんぬ三一さんじ思おもひしれと、立蹴たてけにはつたと蹴飛けりばされ、切兼きかねましき三二さんじ顔色かんとしよくに、不敵ふてきの勘八かんぱち氣きをのまれ、よいくあす迄まで待まちてやる。遅おそひと娘むすめをみせ物ものに売うつてやるか居ゐざいそく。家主かみしやうへも届とどるぞと聞きがしにわめきちらし、路次板ろじばんをふみ立帰たてかへりける。娘むすめは(十九才)袂たもとを喰くしぱり、最前さいぜんよりかたすみに泣なくづおれて居ゐけるが、せめておふたりの貧苦ひんくをお救すく申まをたく、やるまひとおつしやるを願ねがひ申まをた此嫁入こゝめいれ、かふなつては皆欲みなよくに厚皮あつかわづら

三三娘じやといはるゝ此身はいとはねど、つらひせつな
ひ耻かしひ。うき名を立られまだその上、お気をもませ
てお顔をつぶす、百両の金の事、世間へ顔のむけられぬ、
わたくしなきむかしじやと思しめし、勤奉公いたした
ひ。口入所三四へ遣はざれて下さり（十九ウ）ませと、願
ふにぞ娘の心根いぢらしく、母おやは狂気のごとく縁な
き事は是非なけれど、疵を付ての更改はあまりといへは
にくひ仕かた。口おしふなふてなんとせう。せめて福屋
の内へ行、いふたものいはせたものゝ詮義をして、ろく
ろ首といはれた無念、晴さしてやるべしと裾引上て、帯
引しめ長押にかけし長刀おつとり、おもてをさしてかけ
出す、女房を右内とつて引すへ、女わらべの心では、無
念がるは尤なから、今浪人の刃物ざんまいは結納の金を
戻すまひおどし（二十オ）の種といはれて親子三人死ぬ
より外なし。仕おほせてから、相手は町人あばれものよ
気ちがひよ、負おしみと、却て成身か帰参の願ひの妨。

紛失したる小倉色紙三五、盗取たはたしかに軍兵衛、きや
つを詮義し出す迄は、大切の命、気がつかぬかとしかり
付られ、母と娘はなきたをれ、右内も金子調達にとむね
をつける折からに、日暮をいそぐ紙くず買。荷籠を門に
おろし置、最前預て置た紙屑もつて参ると、籠とり出し、
是は中によほど油紙障子のまくりも有はへとおし（二十
ウ）付く手にさはるもの。何やら有と引出したる縞の
小財布そつと懐へ押込む体、右内見る方その手をつか
み、うろんなり三六見せをれと引すり出す小財布しつかり
おもみ。直に親仁を路次へ突出し見れば、小判で百両包。
ハテ、此金はとふしぎの中、紙屑買は籠荷ひ、おもての
方へ二足三足やりやうの無ひ百両の金、うれしや嫁にや
りおほせたとつぶやく声を聞とる親子、さては今のは福
屋の旦那か。お禮をとかけ出る所にながし元方（又廿オ）
白鼠一疋飛で出、門の戸引立へ祝言の盃はのびして
来年の後編。チウ、チウくくくくくくくく

【語釈】

- 一 御ろうじろ…ご覧なさい。
- 二 錦の小路…京都市中京区にある錦小路通りを指す。
- 三 ちてんたい↓地天泰。天の気が下降し、地の気が上昇して陰陽の二気が交わり和するという意。
- 四 周易…報酬を得て吉凶などを占うこと。売卜。
- 五 十八変…仏語。仏菩薩が定じょうにはいつて行う一八種の変化。
- 六 雪隠…便所のこと。
- 七 芥溜…ごみなどの廃物を捨てる所。
- 八 侘住居…人目を避けた住まい。質素で侘しい住まい。
- 九 明店…人の住んでいない家。空き家。
- 一〇 ひねり者…変わり者。へんくつ。
- 一一 月にかすりはどでござんす↓「月に霞はどでござんす」(盃と二本の箸とで色々な形を作ってみせる酒席での余興の際にいう台詞)を踏まえる。
- 一二 鮑の貝の片思ひ…アワビが一見二枚貝の片側の殻だけのように見えるところから、一方からだけ恋い慕うことという。
- 一三 山だしの下女…田舎者の下女
- 一四 手桶の姿見…手桶の中の水面に顔が映る様子。

- 一五 閑所…雪隠のこと。
- 一六 見入る…のぞきこむ。
- 一七 追従…こびへつらうこと。
- 一八 辻…路上。みちばた。
- 一九 縁邊…夫婦の縁を結ぶこと。
- 二〇 変改…約束を破ること。
- 二一 間…ので。
- 二二 にべもなく…思いやりがない。
- 二三 仁躰な…見た目が立派な。
- 二四 近頃…たいそう。
- 二五 笑止…困ったこと。
- 二六 意趣…恨み。
- 二七 素町人…ただの町人。町人を卑しめていう語。
- 二八 材を論ずる…不詳。婚姻という慶事に、些末なこととで因縁をつける、といった意か。
- 二九 夷…田舎者。
- 三〇 慮外…無礼な。
- 三一 守銭奴…金銭に執着し、貯めることだけに熱心な人。けちな人をのしつていう蔑称。
- 三二 切兼ましき顔色↓切かねましき顔色…今にも切りかねない顔つき。

三三 厚皮づら：あつかましい。恥知らず。

三四 口入所：奉公人を周旋することを業とする店。

三五 紛失したる小倉色紙：江戸時代には半数以上失われた、藤原定家筆といわれる『小倉百人一首』の色紙。
定家の評価から高値が付いた。

三六 うろんなり：怪しい。

※本話は近松門左衛門作『夕霧阿波鳴渡』の人名や趣向を部分的に取り込んで作られている。(小栗軍兵衛↓小栗軍兵衛・平岡左近↓平岡右内など)

仇物屋舗の主意気な子を生活

中むかし一の事なりけん、難波津の新町に西扇やの桧扇とかやいへる遊女、ある人に請出二出され、其住すてし別荘の跡、仇物やしきと云ひ伝へて、今は昔になり侍る。爰に閑麗といへる一ッ個の大尽、美にして且粹なる聞へ、里に名高く、二世と契りし逢方三のかならず心易だてより、口舌四となれるきぬぐ五の(又廿ウ)まだ夜ふかきに七軒の茶やが許なる水ぞうすひ、例の癩癩の朝酒を

引かけ、詭置たる駕にゆられながら、駕舁かはなすを聞に、旦那、息杖六の先鉄には三寸下の地の虫も沈むと申、駕かきの守りとなるゆへ、狗もほへませぬと息ぎれしての物語も粹の身にはふびんに思はれ、酒もちこしてふらつけば、舟にせんと紙洗橋の際にて暇をやれば、駕舁共は横付の駕百五十のあぶれましにならぬを悦ひて、わかれぬ。そもく通ひなれたる土手八丁七、くらきを(廿一才)たどる堀のおりぎは、舟かく夜明に近き蛙の声も思ひ有身はかしましく、朝汐干てじれつたき大棧橋より乗出せば、隅田堤の虫の声。御縁日のごとく狐火消くと、狐におとれる逢方の白情を恨み、河東ふしハへうき世の夢のみしかさをかりねの夢にうつしかへわかれになればいふ事もわすれて跡のもの思ひ九、と口舌の鶏をうなりながら、吾妻橋をくじれば、千菜市の青くと小梅あたりのしらむころほひ、舟ほどなく菴崎にかゝる河岸

に嗚呼、是何人の寮一〇なるぞ。柎木垣の奥（廿一ウ）ふかく、廣々たる書院先に一個の美人、小町二が寝起もよも是ほどには有べからず。垣に咲たる朝貞の花ほど口を欠伸して、寝みだれ髪 of 立姿、ぞつと素顔のながし目に「ちぎれ」の雲みれば夕アねぬ身のとけしなき二、われか姿に見とれる風情。慥に二代目の桧扇と、見た目はひが目か頃しも夏の夜のほのくくと利休形二三の石檠。まだ明のこり時鳥、百千かへり一四なく、植込庭の物ずきに、亭主茶人としられ、明はなしたる座敷の内、紗の蚊屋一五河風に飄て、冷し縁側に遣ひ捨しおがひ茶わん一六は定し吉原やうじ一七（廿二オ）紅粉やの齒みがき一八なるにやと粹する程、なを此あるじ心にくく、閑麗うつとりとなりて、舟の内よりうら山しげに見かへれば、かなたも名残をしげに見送る顔の次第に小さく見へて、目鼻もきえくとなりて、心ぼそくも舟、柳橋に着けば、其日逢方の事は思ひたへ、彼李夫人がいにしへ反魂香一九に

あらばこそ、翌日又七つきがりに舟に乘しふな虫をおどろかして、石かけ際を漕すれば、縁なるかな、かの寮の前、美人きらびやかに夕化粧して棧橋に釣をして居ければ、閑麗思はずお釣のおじやまと物いひ懸れ（廿二ウ）ば、愛敬笑をふくみ、夕ぐれの御急ながら、ちよつとおたばこ一ふくとそらさず、又無抛体に饗し、舟着させて座敷へ通し、今宵は内にも江戸へ茶によばれて参、帰りの程もしれざれば、さびしき折からさいわい一ッ献、おすゝめ申さんと料理人を呼て何やら呷く。程なく座附の吸もの出る。其献立に日、まづ鯛に紫阳白魚になめ鱸二〇削烏賊二一に紫蘇の吸もの。取肴には、氷どうぶの其次にもじ戸棚二三より取出す其品々、田螺の粕漬切納豆照 韶阳魚二三とち鰯 鱻 薤 海鼠腸二四の類、器は（廿三オ）風雅におもしろく、捻つて意気なもてなしなり。アノ煎酒は、酒には一向な物でおぎいますね。生醤油

かづのこわさひす なまこ
に鯨鮓山葵酢に生海鼠といふ所が、わたくしはいつそ好
でおざりいすよといふ詞のはし、閑麗心に感じ、扱こそ
なれの果と見て取より、初なじみから打解て互に洒落も
時うつれは、二人が背の蚊をおひながら、居眠ると酌す
る処にいつてねやよと夜づめを引かせ二五、ヲヤ蚊がたべ
てなりイせん。モシへ、御めんなんしへとあいさつして、
すぎやちぢみ二六の裏はしろちりめんの袷かたびら二七を
着かへ、住よしぎれ二八の平くけ二九を（廿三ウ）しめ、御
茶一ツふくと数寄屋に請じ、直に金鳳花を粹て竹村の巻
せんべい三〇龍眼肉三一を口取に出して、さもしとやかに
座して、手もとうつくしき手調の内、閑麗額にて其顔を
見れば、酔ほのやかなる自慢らしき目元、譬へは白練の
下より白粉の包紙の紅摺三三を漉通したるごとく、居ずま
ひくづれて長いもじの白縮緬より猶白きひぎつこ頭は
れ、酔にみだれて茶斤を落せば、おゆるしなんしと立つ
を引とめ、お茶斤臺には及はずと、其手をとれば、目も

うるみ、嬉しげに、ホンニ（廿四オ）ふしぎな御ゑんのは
し、しこつて三三御通ひなんす御方の事、とうからわたく
しはお近付の気になつて、いつぞは御目にかかりたひと
気をもんでおりいした。夫に付ての物かたり、お聞なん
す罪はおざんすまひが、しんに聞ておくんなんし。お咄
し申すも涙のたね。勤のむかし、つきだし三四より、年
の明く三五迄なれ染て、請出されんした此家の旦那、去年
の初秋死わかれ、悲しひに付恋しひに付、本に苦界三六
の其中にも、のろひほど三七、実が有、二度迄勘当三八うけ
なんして小店をかりの揚屋町三九、ばからしひ（廿四ウ）
程わたくしも雲となり、雨となり四〇んしてやうくおの
字の名四一を付て、素足もやほな足袋になり四二、やれ嬉し
やと思ふ間もなくはかなひ別れ、昔の高尾さん四三や小紫
さん四四が御出したなした操にならひ、死なふと思ひ詰
た内、ふつとお見うけ申、先の旦那に肖四五ざんす。あれ
ほど迄にも似るものかと思ひいしたか苦勞のはしまり。

露つゆほどなり共察さつしてなら、力になつておくんなしへと
かきくときたる物語に、夏の夜のみじかき夢を結び、は
や夜明れば、女は名こりおしけに又の御けんは川（廿五
オ）岸にほたんの灯笼とうろう四六をとほし申へし。それをしるし
に來り給へとやくそくして別れぬ。斯て閑麗、雨のふる
夜も風の夜も、通ふほとにく女いつしか胤たね四七をやどし、
易々と玉の男子やすく四八をうみ落せしかふしきやくぢら四九て
一寸五分ほととの赤子、はまくり鬢ひん、ころがきなり五〇に額
をぬき上ケ五一、りうきう紬つむぎ五二の小袖しま縞。かんとこの相
着五三こちき仕立五四のへりとりむく五五黒上田五六のはを
りを着て生れ出ければ、人々膽きもをけし、驚おどろひて朧衣へな五七を
見れば、血すしあらそはれぬ三かい菱ひし五八のかげと桜のひ
よく（廿五ウ）紋もん五九青くくと見ゆれば、閑麗かんれいいよく奇異きゐ
の思ひをなし、頭かしら二ツ有子を産し事、年代記には見へた
れ共、是は通六〇なる子を産し母こそ正まはに化粧けしやうのもの六二。
いで正しやうたい体をあらはさんと既に屏風すでをあけんとして、う

んと斗りに悶絶もんぜつし、しばらく息いきはたへたり。時に産婦赤子
の傍かたはらに寄、今は何をかつまん。誠は此身人間ならず、
年ふ経る首尾しゆひの松六三の性せいなるぞや。今、意氣人いききと契りをこ
め、そなたをうみし上からは、人界かいの望達のぞみたつしたれば、元
の生土しやうどにかへるぞや。必々せいじんしてそろはん（廿六
オ）商売せい出して、孝行なおとなしひ子と誉ほめられられ
よ。むだ金つかひどうらくして、道理よ女郎の子じやも
のと母が名までを穢けかしやんな。おなこりおしひは閑麗さ
ん、信田の妻六三にあらね共、松ふく風をわたしと思ふて
おくれなんしにへ夜明に近き名ごりの鐘かね、涙は尽しおさ
らはと、かきけすごとく失ければ、閑麗ふつと息吹かへ
し、ヤレまで女房かへせもどれとあせれ共、たゞ颯々さつたる
松声せうせいのみ空しき産家の屏風せうくわだうに松花堂六四のさも見（廿六ウ）
事なる手跡しゆせき六五にて、一首の哥を書付たり。

首尾の松の葉

こひしくば猪牙しゆができて見よ今戸なるうれしの森の

さては非情のものなりとも、夫婦の契りをせしうへは、尉ぜうと姥うばともなりもせで、形をかくすは恨うらみみなり。今一度、見へよかしと物ぐるはしく取みだし、茫然ぼうぜんとしてゐたりしが、松のみどり子六七見るにつけ、母をしたふていかばかり、嘆なげかん事のかわひやな、ふびんの童子どうじが有さまやと抱いだきおこす赤いだ（廿七終オ）子のそのなき声
〜 扇あふや〜

これにていちがきかゆる

惟 市 栄 歳暮之大尾（廿七ウ）

振鷺亭主人 話

【語釈】

- 一 中むかし：そう遠くない昔。
- 二 請出：抱え主に金を支払い、遊女・芸妓を引き取ること。
- 三 二世と契りし逢方：夫婦は二世。夫婦の関係は現世・来世まで続く。ここでの逢方は馴染みの遊女をさす。
- 四 口舌：江戸時代、主として男女間の言いあいをいう。痴話げんか。

五 きぬぐ〜↓後朝：男女が共寝をした翌朝。

六 息杖：物をおかづぐ者が持つ杖。

七 土手八丁：江戸、日本堤の俗称。隅田川から三ノ輪までの掘割、山谷堀の土手で、吉原遊郭への通路ともされた。

八 河東ふし↓河東節：浄江戸浄瑠璃の流派の一つ。享保二年（一七一七）、十寸見河東ますみかとうが江戸半太夫の門から分かれて語り始めた、派手で明るい江戸風の音曲。

九 「うき世の夢の〜もの思ひ」：河東節「梅枕くぜつの鶏」（元文五年（一七四〇）二月）の一節。後朝の女心を述べたもの。

* 「うき世の夢のみじかきをハルかりねのゆめにうつしかへクルわかれになればいふこともわすれてあとの。ものおもひ」

一〇 寮：茶寮の名目で造った江戸の富裕町人の別宅や下屋敷。

一一 小町↓小野小町。美貌の歌人として知られる平安時代前期の女流歌人。

一二 「ちぎれ〜の〜とけしなき」：「傾情水調子」（享保一三年（一七二八）の一節）。

* 「ちぎれ〜の雲見れば。夕べ寝ぬ身のとけしなや」

- 一三 利休形：なだらかな弧を描く形の汎称。
- 一四 百千かへり↓復ち返る：繰り返す。
- 一五 紗の蚊帳：薄い絹織物でできた、蚊を防ぐために吊って寝床をおおう網。
- 一六 おがひ茶わん：うがい茶碗。
- 一七 吉原やうじ：江戸時代、江戸吉原の遊郭で用いた総の長い歯磨き楊枝。
- 一八 歯みがき：歯みがき粉。江戸時代、皓歯の男性を粋とみなす風潮があったことから、寮の主人の趣味の良さを示している。
- 一九 反魂香：死人の魂を呼び返すことができるという、想像上の香。
- 二〇 なめ鱸：未詳。スズキの塩辛の類か。
- 二一 削烏賊：イカの燻製の削り節。いかぶし。
- 二二 もじ戸棚↓緞戸棚：緞もじ（麻糸で織った目の粗い布）を戸に張った戸棚。
- 二三 照韶阳臭：ごまめをいり、砂糖としょうゆをまぜて煮つめた汁に入れて、さらにいり上げたもの。正月料理に用いる。
- 二四 海鼠腸：ナマコのはらわたの塩辛。
- 二五 夜づめを引かせる：夜番の腰元に部屋を退出す

- るよう促す。
- 二六 すきやちどみ↓透綾縮：きわめて薄い絹織物の縮み。
- 二七 袷かたびら：裏地付きの着物。
- 二八 住よしぎれ↓住吉切：小さい石畳、または小さい鱗形の模様がある緞子。
- 二九 平くけひらくげ：平縮帯の略。特定のくけ方をした男物の細帯。
- 三〇 竹村の巻せんべい：吉原の「竹村伊勢」で売られていた高級菓子。
- 三一 龍眼肉：龍眼という常緑高木の種子の果肉。食用・薬用。
- 三二 紅摺：浮世絵版画の技法で、墨版のほか少数の色彩も用いたもの。
- 三三 しこつて↓凝る：ある事に熱中する。
- 三四 つきだし↓突き出し：はじめて遊女や芸者となって客の前に出ること。
- 三五 年ソの明く↓年が明く：遊女の奉公の年限が終わること。
- 三六 苦界：苦しみが多い世の中。
- 三七 のろひほど：色情におぼれるほど。

三八 勘当：親子や主従、師弟の関係を絶つこと。

三九 揚屋町：江戸新吉原の町名。元吉原時代、遊里に散在していた揚屋を一か所にまとめたもの。大門から水道尻に向かって右手で、江戸町一丁目と京町一丁目との中間にあつた町並み。宝暦末年に揚屋が廃絶した後も町名として残った。

四〇 雲となり雨となり↓雲となり雨となる：男女の契り。また、その情のこまやかなことをたとえる。

四一 おの字の名を付て↓おの字の名を付ける：遊女を廃業し、源氏名から「お梅」「お竹」といったおの字名の付いた普通の堅気女となる。

四二 素足もやほな足袋になり：足袋を履かないことが粋であつた遊女時代には、野暮だと思つていた足袋だが、自分もその足袋を履く堅気の境遇になつたこと。

四三 高尾：江戸新吉原三浦屋抱えの遊女の名。十一代続く。ここでは仙台藩主伊達綱宗に身請けされたが、恋人を慕つて意にしたがわず、隅田川の中州で吊るし斬りにされたという逸話のある二代目高尾を指すか。

四四 小紫：江戸吉原三浦屋抱えの遊女。金に詰まって強盗を働き延宝七年（一六七九）鈴ヶ森で刑死した情夫白井（平井）権八のあとを追つて自殺した。浄瑠璃、歌

舞伎などに脚色される。

四五 肖：似る。

四六 ほたんの灯籠↓牡丹灯籠：牡丹の花の飾りのある灯籠。

四七 胤：血筋、子孫。ここでは子どもの意。

四八 玉の男子：玉のように美しい男子のこと。

四九 くぢら↓鯨差：物差の一つ。鯨のひげで作つたところから言う。鯨尺。

五〇 ころがきなり：枯露柿のような。

五一 ぬき上ヶ↓抜き上げる：生えぎわの髪の毛を抜いて額を広くする。江戸時代男たちが伊達を気取つてした風俗。通な髪型を指すか。

五二 りうきう紬↓琉球紬：琉球で産する紬。平織で大部分は紺地の茶縞。

五三 かんとうの相着↓関東は関東縞のことで、関東地方に産する多く赤糸入りの細かい縦縞模様の木綿。相着（合着）は近世、上着と肌着の間に着ていた衣服のこと。

五四 こちき仕立↓乞食仕立：木綿襦袢の仕立て方の一つ。襟の周りと八つ口の辺に、僅かずつ緋縮緬のきれを覆つて、全体が緋縮緬できて見えるように見せるもの。

五五 へりとりむく↓縁取無垢：表裏とも無地の同色

の布地に他の布地でへりをつけた衣服。

五六 黒上田：黒の上田縞。上田縞は、江戸時代、信州上田地方で産出された強靱な紬の縞織物。

五七 胞衣↓胞衣着：生児に最初に着せる白木綿の袖なし。産婆などが持つてきて着せる。

五八 三かい菱↓三階菱／三蓋菱：紋所の名。菱形を三つ重ねた形を圖案化したもの。また、歌舞伎俳優市川団十郎の替紋としても用いられた。

五九 ひよく紋↓比翼紋：自分の紋所と情人の紋所とを組み合わせた紋。

六〇 通：人情にさどく、花柳社会などの事情に明るいこと。また、野暮でないこと。

六一 化粧のもの↓化生の者：化物。妖怪。

六二 首尾の松：江戸時代、江戸浅草蔵前の付近、隅田川のほとりにあった松。吉原往來の船路にあたり、吉原通いの目印にされたという。

六三 信田の妻↓信田妻：説経節または古浄瑠璃の作中に現れる安倍晴明の母。信太の森の白狐が葛の葉姫に化けて安部保名と契り一子を儲けたが、正体を知られて古巢に帰ったという伝説を主題とし、歌舞伎・浄瑠璃を通じて近世に流布した。

六四 松花堂↓松花堂流：書道の流派の一つ。松花堂昭乗を祖とする。

六五 手跡：筆跡。

六六 尉と姥：謡曲「高砂」に登場する老翁老嫗。「高砂」は、肥後国（熊本県）阿蘇の宮の神主が、播州（兵庫県）高砂の浦に着く。そこへ木陰を清める老人夫婦が現れて松のいわれを述べる。二人は高砂と住江と場所を隔てても通い合う相生の松の夫婦愛を語り、自分達がその二人であると告げて沖に消える。神主たちが住江（大阪市）に着くと、住吉明神（神松の精とする流儀も）が現れ神舞を舞い、祝福を与えるというもの。ここでは、女の正体が同じく松の精であったことから出た言葉。

六七 みどり子↓嬰兒：三歳ぐらいまでの子ども。赤児。赤子。幼児。松の緑色と掛けるか。

【卷末広告】

- たうせんきやうしよへん ころへん かうゑきしんわ すいでうかうけい
投扇興 初篇全 後篇全 / 甲駅新話全 / 醉丁甲蘭全 /
なんかくぶんしう ばいんわしんゑき せせつしんごぎ たかようじ
南客文集全 / 賣花新駅全 / 世説新語茶全 / 多佳余宇辭全 /
たいへらくのまきもの たうちうすごろく ふかかはいけん ふかかはしんわ
太平楽巻物全 / 道中酔語録全 / 深川拝見全 / 深川新話
ゆうりくわいだん むつばかりかね つうじんまくらことば やほのちやうめい
全 / 遊里會談全 / 居續雁金全 / 通人枕言葉全 / 屋保長命
しきものかたり たいつうひみつろん しんろていはなしにつき
四季物語全 / 大通秘密論全 / 振鷺亭晰日記全 / いろは
すいごでん おゑどかざりゑび しままくらおほやまさんけいき ゑど
酔故傳全 / 御江都銚鰈全 / 江の嶋鎌倉大山参詣記全 / 江戸
しゆらんくわれきへんりやくしじゆうくほんろく ねんちうきやうじゑどものみかおか
巡覧花曆便畧 四時遊観録 折本 / 年中行事 江都物見ヶ岡
まうしうたうしうおんせんし せわもんじゆ ほくしう
折本 / 相州豆州温泉志 全 / 五字おり句世話文殊全 / 北州
いそろくじやう りやうごく おゑどのがねぎく
異楚六帖全 / 兩國しぼり全 / 御江都金菊全 /
きやうかたからあはせのき ふたはくき らくりつあんきやうかしう
狂哥宝合記三冊 / 狂哥二葉艸全 / 落栗庵狂歌集全 / 五字
ひらきやせう はくしやうきだんごがらしさうし
折句平氣家抄全 / 柏掌奇談 風草紙五冊